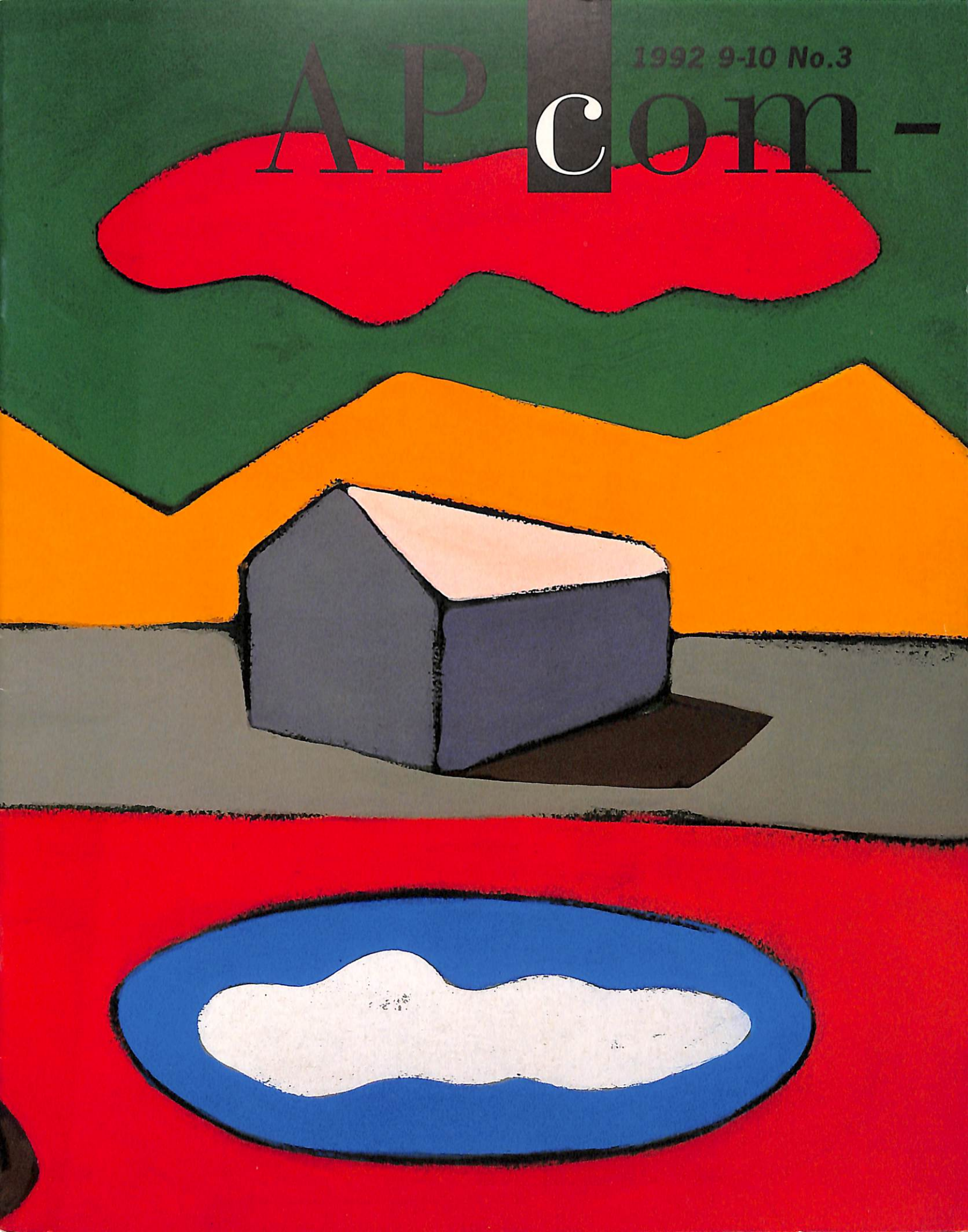


APcom -

1992 9-10 No.3



Wien ウィーン 凝縮された世紀末

広大な中央ヨーロッパを統治したかつてのオーストリア＝ハンガリー帝国の都ウィーン。

19世紀末、ハプスブルグ家の落日に夢と現実が、生と死が、エロスと闇が交錯し、崩壊と新生の軋みの中から華麗な世紀末芸術が開花した。

建築もまた古い殻を脱ぎ捨てて、近代への模索をはじめた。

近代建築の父と言われるオットー・ワグナー。

伝統と戦いながら明晰な理論のもとにつくりだした建築群は、

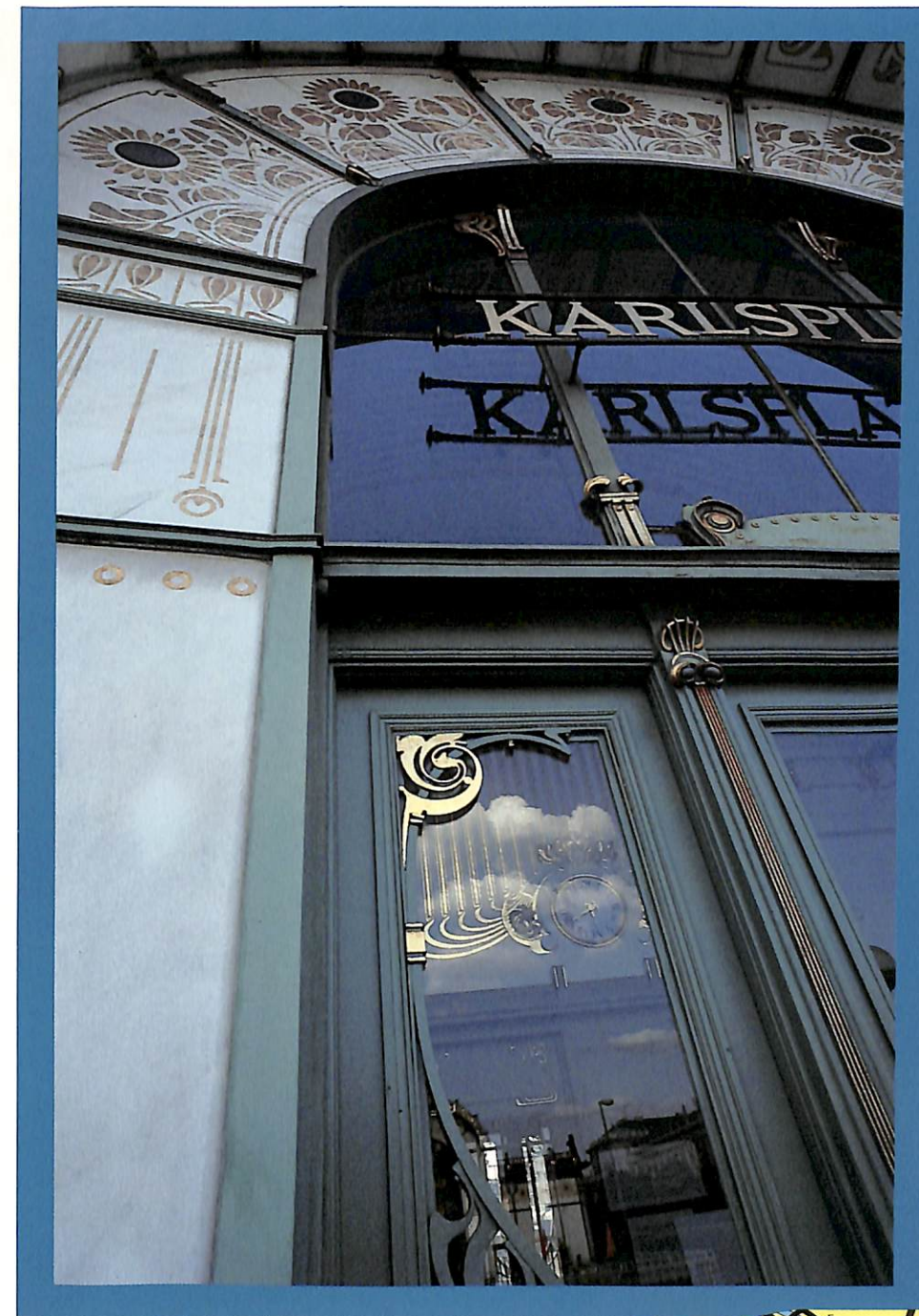
今もお斬新な姿で近代建築生成の道を指し示している。

今号はワグナーを中心にウィーンの都市と建築を紹介する。

写真：普後均

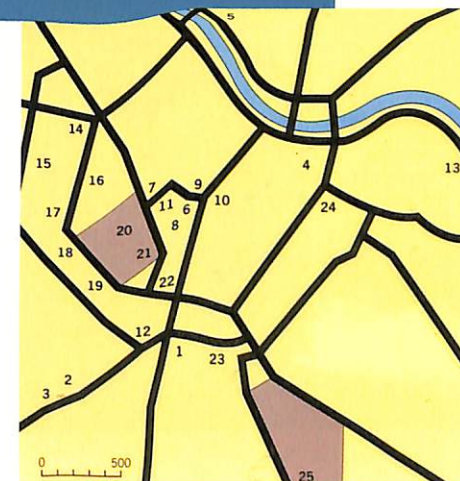
CONTENTS

AP.com-REPORT 世界の建築文化を訪ねて ③ ウィーン／凝縮された世紀末	世紀末を生きた ウィーンの建築文化 ロート美恵	ウィーン・ ミュージアム・ガイド	ウィーンの 都市と建築を知るキーワード	AP.com-AREA STUDY 販売店のあるまち ③ 熊本・八代市 合資会社トガノ木工	AP.com-FORUM ARCHITECTURE VIEW UP 日神山T.H邸／ かりゆしビーチリゾート	INFORMATION 建築デザイン会議'92 IN KUMA MOTO／清川工場完成のお知らせ ／1993年YKKカレンダー／YKK・ CUPPLESデザインフォーラム
1	11	13	15	17	21	25



1. カールス・プラッツの駅舎
2. ウィーンツァイレ38番地の賃貸住宅
3. ウィーンツァイレ40番地の賃貸住宅
(マジョリカハウス)
4. ウィーン郵便貯金局
5. カイザーバートの水門監視所
6. アンカーハウス
7. ロースハウス
8. アメリカンバー
9. ハースハウス
10. シュテファン教会
11. シュリーネ宝石店
12. 分離派館
13. フンデルトヴァッサーハウス
14. ウィーン大学
15. ウィーン市庁舎
16. プルク劇場
17. 国会議事堂
18. 自然史博物館
19. 美術史美術館
20. 王宮
21. 版画素描館アルベルティーナ
22. オペラ座
23. ウィーン市歴史博物館
24. オーストリア応用美術博物館
25. ベルヴェデーレ宮 上宮19・20世紀絵画館

カールスプラッツ駅の駅舎。
ワグナーは市営鉄道の36の駅舎
を設計した(1898-99)
前頁：ワグナー設計のウィーン
ツァイレ38番地の賃貸住宅。世紀
末のアル・ヌーヴォー様式が窓
の装飾に影を落としている(1898)



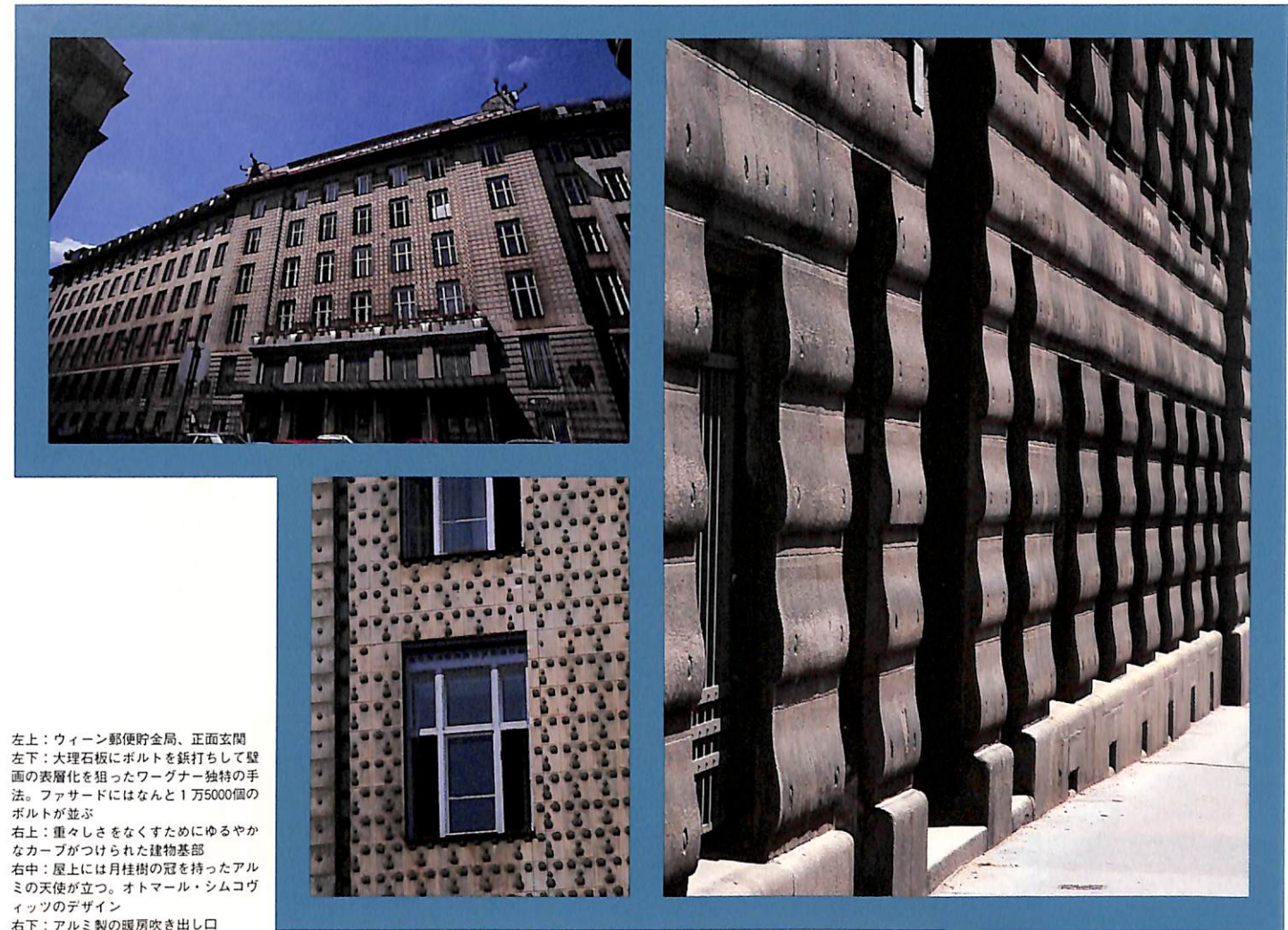
Pre modern

近代建築への揺籃

歴史主義建築の終焉を宣言したワグナーは、時代に相応しい建築を求めてさまざまな試みを展開する。目的と構造の把握、あらゆるモチーフと材料の利用。建築の実用性から発想された理論は、ウィーン郵便貯金局に結実する。近代建築への第一歩がここからはじまった。



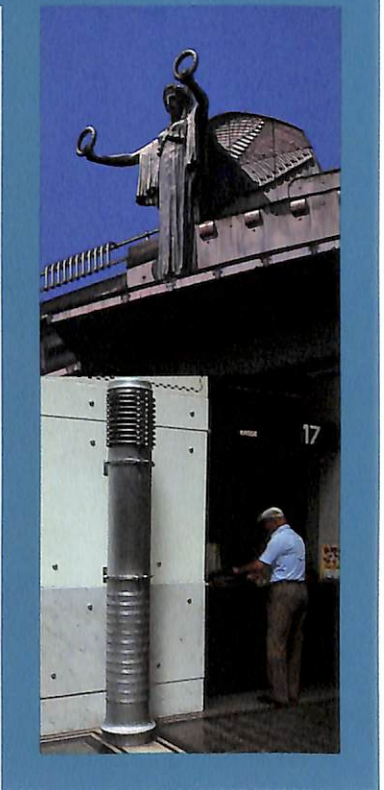
ウィーン郵便貯金局。
二重のガラス天井から降り注ぐ光が浮遊感を感じさせる柔らかな空間をつくっている(1904-06)



左上：ウィーン郵便貯金局、正面玄関
左下：大理石板にボルトを鉄打ちして壁面の装飾化を狙ったワグナー独特の手法。ファサードにはなんと1万5000個のボルトが並ぶ
右上：重々しさをなくするためにゆるやかなカーブがつけられた建物基部
右中：屋上には月桂樹の冠を持ったアルミの天使が立つ。オトマール・シムコヴィッツのデザイン
右下：アルミ製の暖房吹き出し口

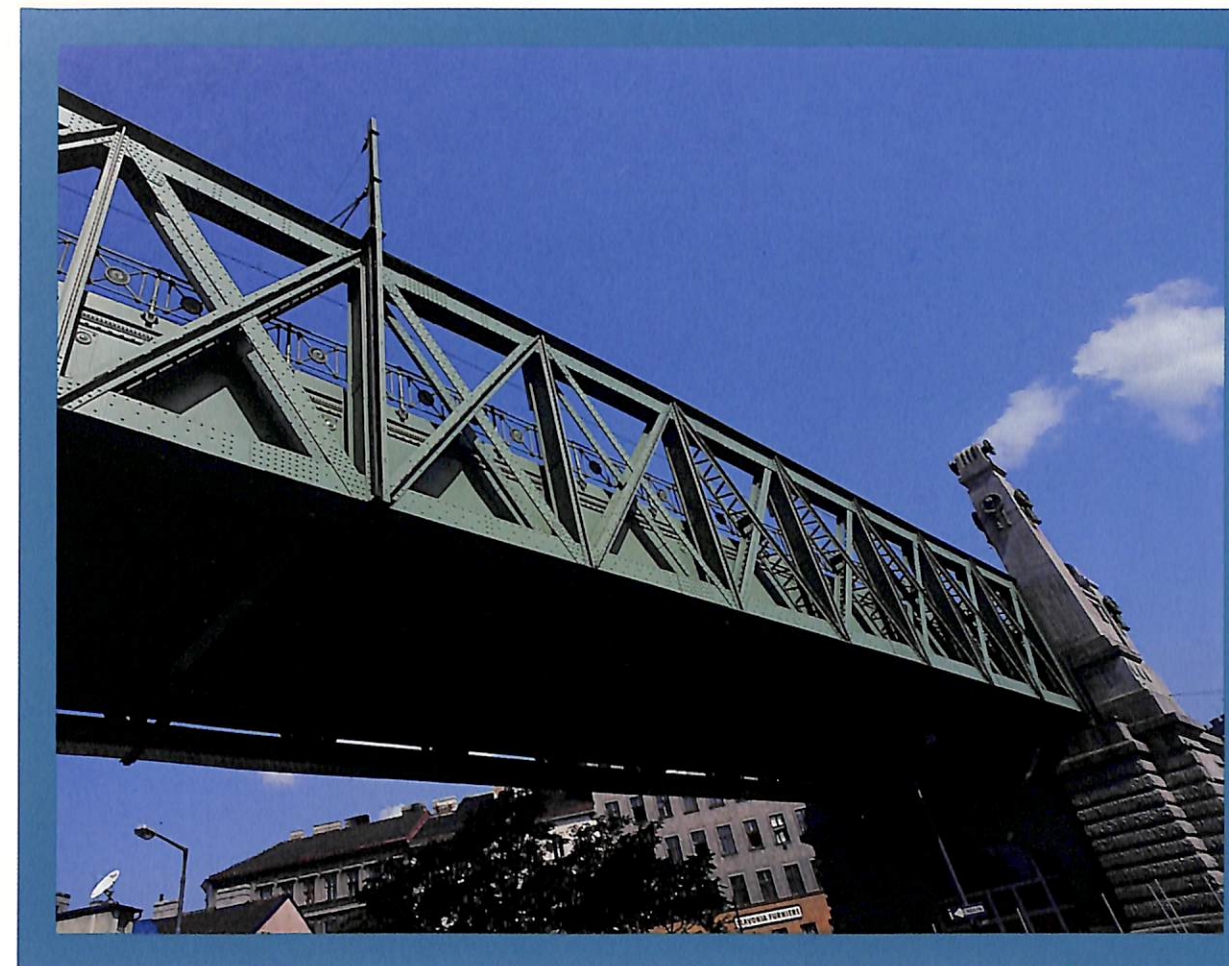
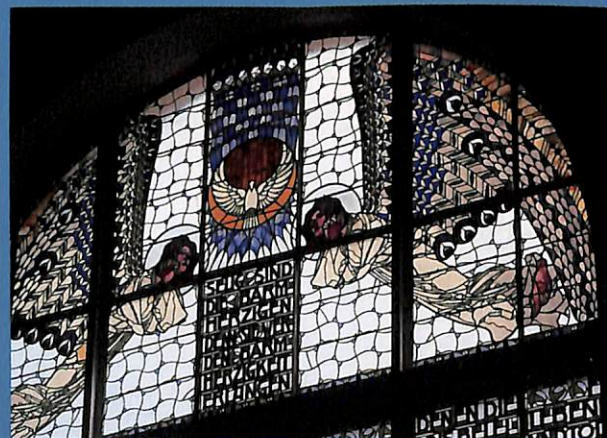
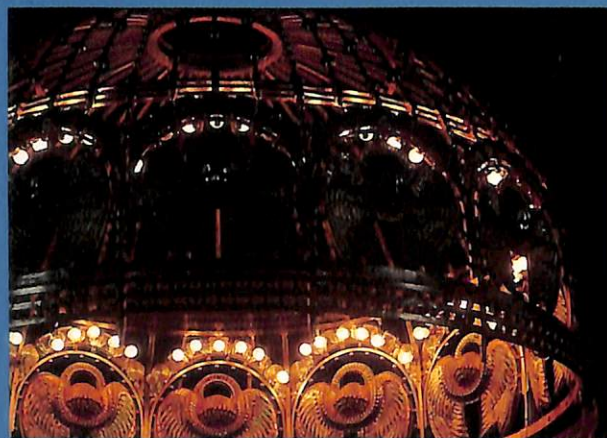
「実用的でないものは決して美しくはなれない」……1894年、ワグナーは重々しい旧弊の装飾によってないがしろにされている、建築本来の実用性・機能性を重視すべきであるという建築論を提唱した。「目的の厳密な把握、入手・加工しやすく耐久性ある安価な材料の選択、単純で経済的な構造」そして「以上を考慮して生成される形態」が我々の時代の芸術様式である、とワグナーは主張したのだ(これは2年後に「近代建築」として出版される)。明快に要約されたこの理論は、近代建築を予言したものとして多くの建築家に影響を与えていく。そしてこれはまた、歴史主義終焉への宣告でもあった。むろん、これまでもワグナーは、アンチ歴史主義へのさまざまな試みを実作で重ねてきた。なかでも彼がこだわったのは、重々しく仰々しい壁面を、なんとか軽やかに平面化したいということだった。が、その試みは「ズボン吊り建築」という仇名でウィーン市民の

猛烈な反対と非難にあう。ズボン吊り建築…つまり、上着を着ていないシャツだけの建築。むき出しで、中途半端で、歴史主義建築のように盛装していない、という意味だろうか。こうした果敢な実験の繰り返しと、独自の建築思想が見事に集大成された作品が、ワグナーの名を不動のものにしたウィーン郵便貯金局である。ここでワグナーは建物の表面をすべて鉄打ちにしてしまった。大理石の薄板をアルミの鉄で止めて、鉄の頭をすべて露出させてしまったのだ。まるで紙片をピンで止めたかのような、軽やかな外観の演出。内部空間もまた軽やかで柔かい。二重のガラス屋根から降り注ぐ光がガラスブロックの床に反射して、繭に包まれているかのような浮遊感を感じさせている。とても100年前の建築とは思えないほどの斬新さとすばらしい空間構成。近代への第一歩が確かにここには息づいている。





上：アム・シュタインホーフ
教会の内部
左：主祭壇の天蓋
右：ステンドグラスはコロマ
ン・モーザーのデザイン



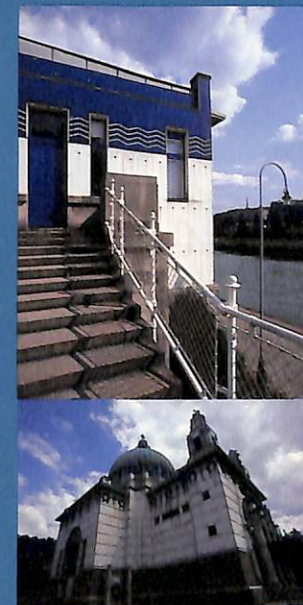
ウィーン郵便貯金局と並んでワグナー建築の双璧とされているのが、アム・シュタインホーフ教会である。ウィーン市郊外、広大な敷地に広がる精神病院の付属施設として建てられたこの教会は、小高い丘の上、木々の緑に囲まれて立っている。

ここでもワグナーは、郵便貯金局と同様に大理石板をボルトで釘打ちして平滑な壁面を実現している。ワグナーにとって重要だったのは、神の世界を荘厳なまでに飾りたてることではなく、あくまでも教会における実用性、機能性であった。しかもここは病院である。軽度の精神病患者がゆったり座れる4人掛けのベンチは、万一の場合、助け出すことが容易なように設計され、実現はされなかったが地下には応急手当室とトイレを配置するなど、ワグナーの建築理念が細部にまで生かされている。

小高い丘を登りつめて、緑の木立の中の教会に立つ時、おそらく多くの人が大きな感動に包まれるはずだ。白い大理石と緑のドームの対比。内部の白天井を覆う繊細な金の装飾。

東方的、ビザンティン的な雰囲気漂わせながら、人を優しく包みこむ不思議な空間。機能主義の極みで現代の建築が忘れてしまった、魂や感覚への訴えかけのようなものが、ここには息づいている。郵便貯金局にも通じる新鮮な空間感覚は、近代様式を予言し先取りしながら一方で保守的な側面も併せ持っていたワグナーの、微妙に複合されたスタイルから醸し出されているのかもしれない。晩年のワグナーは執筆・出版活動とともに精力的に仕事をこなし、市営鉄道の駅舎や橋梁、ドナウ運河の水門などを次々に設計していった。設計競技に参加し、ウィーンの都市計画、博物館や学校、図書館などの膨大なスケッチを残したが、実現されたものはそのうちの僅かである。

第一次大戦後の混乱が続く1918年、ワグナーは志半ばにして病没する。同じこの年、コロマン・モーザーも、クリムトも、エゴン・シーレも、相次いでこの世を去った。1918年…それはハプスブルグ家最後の皇帝がスイスへ亡命し、帝国が滅亡した年である。



上：ウィーン川とその左岸にかかる陸橋。ワグナーはこうした建造物でも技術者だけに任せず、共同で設計していった(1898)
中：ドナウ運河に面したカイザーバートの水門監視所。壁面は大理石板がボルトで固定され、その上部は白い波線のあるコバルトブルーのタイルで飾られている(1906-07)
下：アム・シュタインホーフ教会の外観。建物基部の世積みは日本の城郭建築を思わせる

Fin de siècle

もうひとつの世紀末

近代建築の礎を築いたワグナー。

その後に続いたアドルフ・ロース。

近代へと架橋した彼らの建築は、

それを読み解く者に今もなお多くの示唆を与えてくれる。

そして、世紀末を再び迎えたウィーンでは、

変革の胎動がまたはじまろうとしている。



近代建築の産みの苦しみを演じながらも、その確かな礎を築いたオットー・ワグナー。多くの弟子を育て、各国の建築家たちに影響を与えてきたが、彼の建築理念を純粹に引き継いだのはアドルフ・ロースであろう。「装飾は罪悪である」という衝撃的な論文でセンセーションを巻き起こしたロースは、建築からすべての装飾を剥ぎ取った。ワグナーが繰り返し試みた壁面の平面化を、ロースは究極にまで展開していくのだ。その典型的な作品が、王宮前のミヒャエル広場に面して建つロースハウスである。しかし近代へとさらに一歩近づいたこの建築も、当時の人々の猛反対にあう。ワグナーの「ズボン吊り建築」に対して、ロースハウスはコーニス（軒蛇腹）を取り払ったことから「眉毛のない建築」という仇名をきせられるのだ。

ワグナーのマジョリカハウスも、あのウィーン郵便貯金局ですらも人々の反感を買ったという事実。それは決してウィーンの人々が保守的で頑迷だったからではない。近代建築へと至る揺籃期にあったから、いやむしろ伝統と新しいものがせめぎあう時だからこ

そ、その中から独自の文化を^{そうせい}簇生させるのだという都市ウィーンの意志があったからだ。その意志が、歴史の積み重ねを積極的に重層・交錯させた、奥行きのある魅力的な都市ウィーンをつくってきたのである。その意志は現在もおウィーンに脈脈と生き続けている。1990年、ウィーンの現代建築をリードするハンス・ホーラインが市の中心部、シュテファン教会の真向かいにポストモダン建築のハースハウスを設計した時にも論争が巻き起こった。そして今、95年に開催されるウィーン万博を間近に控え、都市再開発のための建築プロジェクトがあちこちで進められている。ウィーンはどのような都市の未来を選択し、凝縮されたもうひとつの世紀末を生きていくのだろうか。

参考文献：『世紀末の中の近代 オットー・ワグナーの作品と手法』（越後島研一、丸善）、『オットー・ワグナー』（H・ケレーツェガー、M・バイントナー著、伊藤哲夫・衛藤信一訳、鹿島出版会）

左：アドルフ・ロース設計のロースハウス。当時はゴールドマン&ザラチェ紳士服商会だったが、現在はライフアイゼン銀行ウィーン支店ビルとして復元・再利用されている（1910）
上：ロース設計のジョイ邸（1913）
中：ハースハウス。設計はハンス・ホーライン（1990）
下：ハンス・ホーラインの名を一躍有名にしたポストモダンの仕事。シュリーレン宝石店（1981-82）
前頁：ウィーンのいちばんの目抜き通り、シュテファン教会の真向かいにポストモダン建築のハースハウスが誕生した。景観をめぐる紛争は5年も続き、設計変更が何度も繰り返された

世紀末を生きるウィーンの建築文化

ロート美恵

ウィーンの友人から一通の手紙が届いた。旧市街の心臓部シュテファン広場にハンス・ホーラインが設計したとびきり派手な複合ビル、ハースハウスが経営困難に陥っているという。そんな内容の手紙に添えて、ご丁寧に新聞の切り抜きまで添えられていた。旧市街の景観を損なうという世論の反対を押し切って建てられた上に経営不振。ハースハウスを報道する記事に容赦はない。思えばこのプロジェクトの是非を巡り、ウィーンでは過去5年近く白熱した議論が戦わされてきた。東京では考えられない現象である。一般市民をも巻き込んだその論争は、竣工から2年以上たった今もまだ終わりを見ない。アドルフ・ロースやホフマンなどに続くウィーン建築文化の担い手として、世界的にも評価されてきた建築家ハンス・ホーライン。そんな彼にとっても、地元ウィーンを足場に活動することは過大なエネルギーを要する作業に違いない。

今世紀初頭、この一筋縄ではいかないウィーンを舞台に、じつに数多くの才能が開花していった。旧市街を中心に放射状に広がるウィーン独特の都市構想の発案者でこのまちに多くの作品を残したオットー・ワグナー。「装飾と罪」なる本をして装飾過剰な小市民趣向に宣戦布告をした革命家アドルフ・ロース。毒舌の達人ウィーン子がキャベツの館とけなした若き芸術の神殿、分離派館の設計者オルブリッヒ。すでに80年近くも前、コンクリート打ち放しの教会を建ててしまったプレチニック。ナチの手を逃れスウェーデンに亡命しながら、ウ

ィーンの住宅文化に過大な貢献をもたらしたフランク。そして海の向こうアメリカ西海岸に豊かな建築文化をもたらしたノイトラにシンドラー。当時広く中央ヨーロッパを統治していたハプスブルグ帝国の首都ウィーンは、ヨーロッパでもっとも国際的な都市のひとつであった。ちなみに芸術アカデミーで教鞭をとっていたオットー・ワグナーの門下生達も、その出身地はウィーンにとどまらずメーレン、バーメン、ブラハ、スロベニア地方（旧チェコスロバキア）、ブタベスト（ハンガリー）、シュレーゼン（現在のポーランド）、果てはトリエスト（イタリア）にまで及んでいる。ウィーンの森郊外、精神病院の敷地内にあるシュタインホーフ教会の前に初めて立った時の興奮を私は忘れないだろう。東洋の城壁にも似た腰壁は大地にどっしりと根をおろし、カソリックの教会というよりはどことなく古代インドの仏閣を連想させる青銅の天蓋が、小高い丘の上にそびえ立つ。そしてノマド（遊牧の民）のテントのごとく、訪れる人を心地よく包む柔らかな内部空間。折衷様式？としか表現のしようがないワグナー建築は、幽黙な雰囲気醸し出していた。ゴシックでもバロックでもない、ビザンチン？いやいまだかつて接したことのない未知の文化に触れる戸惑いと同時に、いつかどこかで見たような遠い記憶に訴えかける。ワグナーの建築にある懐しさや親しみのようなもの。国境という意識をはるかに超え、民族のるつぼの中から成熟していったコスモポリタンな建築の形がある。近代建築の父ともいうべきワグナーがウィ

ーンに残した一連の作品は、いかにも雄大で現代の建築家の多くがどこかに置き忘れてしまったモラル、アカデミックな建築の信念を思い出させてくれる。永遠に発展を遂げる未来を信じて計画された都市構想と交通網。構造材と仕上げ材との明解な使い分け。石材やメタルそしてガラスから木材に至るまで、ワグナーの建築では、建材ひとつひとつの持ち味が素直に生かされてゆく。それに比べると同じモダニストとはいえワグナーに続く世代、帝国の崩壊をまのあたりにしたオルブリッヒやアドルフ・ロース、ましてやプレチニックともなると、その建築思考は一転して屈折しかつ複雑になっていくようだ。一番てっとりばやい例がディテールなど、細部への執拗なまでのこだわりかもしれない。オーストリア最後の皇帝フランツ・ヨーゼフ一世が住んだ宮殿のあるミヒャエル広場。その広場を介して宮殿の反対側に建つシンプルな建築。確か1910年に建ったと記憶しているが、そのファサードはまるで去年竣工したばかりというようにいつ見ても新鮮だ。シンプルな外観ゆえ、例の如くうるさいウィーン子達の大反感を買ったのが、ほかでもないこのロースハウスである。一見するところ、これ以上そぎ落とすことは不可能なほど簡素なこのファサード。しかしよく見ると正面玄関にあしらわれた大理石の列柱の微妙な模様をはじめ、内部空間、たとえば階段室ひとつをとっても、ロースが主張し続けた合理主義の枠などにはおさまりえない、オルガニックなデザイン、人間の深層心理に訴える秘めやかな空間が創造されている

のだ。そして同じくロースの設計したアメリカンバー。わずか10坪にも満たないこのバーは天井にはめこまれた御影石と壁面上部に貼りめぐらされた鏡によって、無限な虚構の広がりを見せる。ここを訪れるたびに私が連想するのは、ほかでもないマウゾレウム（遺体安置の空間）である。ハンス・ホーラインを一躍有名にした交通公社の内装には、ピラミッドをはじめ崩れかかったギリシャ柱から伸び上がる真鍮、壁面のだまし絵から実物へと移行する椰子の木など、さまざまなモチーフが用いられている。この内装について彼は語った。「一つの対象、たとえばピラミッドを見てある人は単純にピラミッドを、ある人はエジプトを連想し、またある人はファラオを連想するかもしれない。またなかには墓場をあるいは漠然と死を思うかもしれない。教育とか経験とか、人はそれぞれが属する文化的なバックグラウンドによって同じ対象を見ていても感じることは違うだろう」私は彼のこの言葉の中に、ウィーン建築が私たちを引き付けてやまないなにかがあると信じている。アンビバレントで一辺倒には解釈しえない、ウィーンにはそうした奥の深さがあるのだ。未知のものは我々の好奇心をそそる。そして一度その深遠の縁をほんの少しでも垣間見たものは、建築に限らずともこのまちの虜になることは避けられないのかもしれない。

（ろーと・みえ／建築家・建築設計事務所アトリエKAOS主宰）

● ベルヴェデーレ宮 上宮 19・20世紀絵画館

Schloss Belvedere Ober Palast, Österr.
Galerie des 19 und 20 Jahrhunderts

ウィーンといえばやはりグスタフ・クリムト、そしてエゴン・シーレやオスカー・ココシュカ。華麗な顔龐と死の予感を描いた世紀末芸術の画家たちを抜きにしてウィーンを語ることはできない。その彼らの作品を最も多くコレクションしているのが19・20世紀絵画館だ。

3階の展示室に入ると、クリムトの、あのあまりにも有名な「接吻」や「ユーディッ



ベルヴェデーレ宮の中に19・20世紀絵画館がある

ト」の連作が目飛び込んでくる。ビザンティン美術の影響を受けた輝く黄金の背景、モザイク風の過剰なまでの装飾が、この世離れた甘美なエロティズムを感じさせる作品だ。そして28歳の若さで夭逝したシーレの代表作「自画像」「抱擁」、ココシュカの「母と子供」など、当時の新しい芸術運動の息吹に触れることができる。19・20世紀絵画館があるベルヴェデーレ宮殿は1700年代はじめに建てられた豪華なバロック建築。設計はバロック期最後の巨匠ヒルデブラントだ。上宮と下宮（中世美術館とバロック美術館になっている）との間には、ゆるやかなスロープを生かした美しいバロック式庭園が広がっている。

開館時間：火～日曜日・祝祭日10：00～16：00
月曜日休館

料金：60シリング（720円）

※1シリング＝12円で計算



クリムト「接吻」(1907-08)



エゴン・シーレ「自画像」(1911)

● 美術史美術館

Kunsthistorisches Museum

ハプスブルグ家歴代の膨大なコレクションを収めたウィーン最大規模の美術館。ここを訪ねるためだけにウィーンに来る人も多いというほど、名作がそろっている。なかでもブリューゲルやデューラーの作品群、オランダ、フランドル、ヴェネツィア派の絵画は定評あるものばかりだ。

とくにブリューゲルに関しては、ここが最高のコレクション。16世紀ネーデルランドの農民の生活と自然を描いた「農民の結婚式」「農民の踊り」「雪の中の狩人」「牛の群れの帰り」など、お馴染みの代表作がズラリと並んでいる。画面いっぱいにはまき散らされた大勢の人物や動物たち、その細部に込められたブリューゲル独特の寓意の世界を読み解く楽しみは、ここならではのものである。

デューラーの大作「一万人の殉教」「聖三位一体の礼拝」、フェルメール「アトリエの画家」、レンブラント「自画像」も見逃せないし、世界でも有数のコレクションと



美術史美術館

なっているヴェネツィア派の作品も、ティツィアーノ、ティントレット、ヴェロネーゼのものが目白押し。考えてみれば、ヴェネツィアはかつてはハプスブルグ家の属領。当時の帝国の支配力を見せつけられる思いだ。1891年完成の建物外観、重厚な内装、クリムトの壁画にも注目したい。

開館時間：4～10月＝火～金曜日10：00～18：00
土・日曜日・祝祭日9：00～18：00
11～3月＝火～金曜日10：00～16：00
土・日曜日・祝祭日9：00～16：00
月曜日休館

料金：45シリング（540円）



ブリューゲル「農民の結婚式」(1568)

● 自然史博物館

Naturhistorisches Museum

マリア・テレジアの像をはさんで、美術史美術館の向かいにあるのが自然史博物館。1889年開館だから100年以上の歴史を持つ。自然史など興味がないという人にも絶対にお薦めしたいほど展示品は圧巻。というのも、マリア・テレジアの夫フランツ・ロートリンゲンが収集した大コレクションが基礎になっていて、これだけの量を一度に見られる機会はそうないからだ。

まず動物の剥製群が延々と続く。オオカミ、アザラシ、バッファロー、シマウマ、キリン、ゾウ…そして鳥類、爬虫類、蝶類、貝類、魚類などなど、目・科・属ごとに、日本ではちょっと考えられないほどの夥しい量が陳列されている。それらが時代ものガラスケースに収まっている光景は、不



自然史博物館

気味さを超えて、自然の叡知すら感じさせる。岩石、隕石、鉱物なども目を見張るほどの内容と量。18～19世紀に黄金時代を迎えたヨーロッパの博物学の真髄に触れることができる。

開館時間：4～10月9：00～18：00
11～3月9：00～16：00 火曜日休館
料金：80シリング（960円）

● 版画素描館アルベルティーナ Graphische Sammlung Albertina

リンク中央に位置する巨大な王宮のいちばん端（国立オペラ座寄り）の建物に入っていて、入り口がなかなかわかりにくい。しかし、版画・素描のコレクションでは世界最大、100万点以上といわれていて、小さいけれども見逃したくない美術館だ。デューラーの素描150点をはじめ、ミケランジェロ、レンブラント、ルーベンス、ゴッダ、クリムト、エゴン・シーレ、そして日本の



版画素描館アルベルティーナ

木版画と、15世紀から現代に至る名匠たちの作品が幅広く収められている。企画展示が中心で、訪れた時には「BODY LANGUAGE IN THE ARTS」と題した人体スケッチ中心の展覧会が開かれていた。デューラーの有名な「アダムとイブ」や、機能主義建築の創始者ル・コルビュジエの珍しい人体素描など、さすがアルベルティーナだけあって充実した内容であった。

開館時間：月・火・木曜日10：00～16：00
水曜日10：00～18：00
金曜日10：00～14：00
土・日曜日10：00～13：00
7・8月の日曜・祝祭日休館
料金：45シリング（540円）



デューラー「アダムとイブ」(1504)

● オーストリア応用美術博物館 Österreichisches Museum für Angewandte Kunst

イギリスのサウス・ケンジントン美術館（現ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館）に示唆されて工芸美術高揚のために1864年につくられた。オーストリア＝ハンガリー帝国ではじめての国立の美術館であり、またヨーロッパ大陸最古の工芸美術館でもある。1898年から機関誌「美術と工芸」を刊行、分離派とともに世紀末ウィーンにおける新しい芸術運動の推進に果たした役割は大きい。ガラスや陶磁器、タペストリー、家具、種々の調度品など、中世からア



オーストリア応用美術博物館

ール・ヌーヴォーに至る収蔵品は見逃せないものばかり。隣接した応用美術アカデミーとの間の塀には、ハイリンヒ・フェルステルとF・ラウフェンベルガーがデザインしたパラス・アテネのモザイクが装飾されている。現在、大々的な改修工事中。

開館時間：11：00～18：00 火・水曜日休館
料金：30シリング（360円）

● ウィーン市歴史博物館

Historisches Museum der Stadt Wien

ウィーンの都市生成の歴史を知るには格好の博物館。紀元前後から現在に至るまでの変遷が、模型や古地図などで展示されている。とくにトルコ軍によるウィーン包囲図、当時の武器などが興味をひく。ここでもクリムトやエゴン・シーレの絵画、ウィーン工場の食器類や調度品、アドルフ・ロースの室内原寸模型などが見られる。

開館時間：9：00～16：30 月曜日休館
料金：30シリング（360円）



ウィーン市歴史博物館

ウィーンの都市と建築を知るキーワード

■リンク・シュトラッセ

1860年代、ウィーンは中央ヨーロッパを支配する強大な帝国の威信をかけて都市大改造に着手する。そのひとつが、城壁を取り壊してつくったリンク・シュトラッセ（環状道路）である。そして、いびつな円形を描くこの道路沿いに公共建築物を次々に建設していった。帝国のお抱え建築家たちが設計した建物は、過去の建築様式を模倣し



ウィーン市庁舎

た歴史主義のもののばかり。しかも市庁舎はゴシック様式、国会議事堂はコリント様式の列柱が並ぶギリシア神殿風、大学はイタリア・ルネサンス様式と、ありとあらゆる様式が、帝国の威厳を表すために節操もなく模倣されたのである。さらにこの合間をぬって、泡沫会社時代と呼ばれるほどに急成長した1870年代の、歴史主義的な建築が林立していく。これらの建築物は現在もそのまま残っているの、市電に乗ってリンクを一周してみるとよくわかる。



国会議事堂

■アール・ヌーヴォー

19世紀末から今世紀初頭にかけて、美術・工芸・デザイン・建築・音楽・ファッションなど幅広い分野で世界的に流行した様式。しかし多彩な側面を持っていて、統一様式が全世界に流布したのではなく、それぞれの国が、それぞれの方法で、新しい芸術創造に向けて独自の様式を打ち出していった。建築に関しては、表層の強調、植物的形態の装飾、という特徴が挙げられる。代表的な建築家としてはブリュッセルのオルタ、フランスのギマル、スコットランドのマッキントッシュなど。また表層の強調を発展させて近代建築へと架橋したのがワグナーであり、植物的形態を自然や生命にまで深めて独自の世界を創造したのがガウディであろう。アール・ヌーヴォーは建築様式としては非常に短期間に終わってしまったが、19世紀を支配した歴史主義と1920年代に確立された近代建築とを結ぶ重要な役割を担ったといえるだろう。

■ゼツェション（分離派）

既存の保守的な芸術団体から「分離」し、新しい芸術活動をすすめるために結成された集団。1892年ミュンヘンで最初に起こり、ウィーンでは1897年に結成された。初代会長はクリムトで、ワグナーの弟子のヨーゼフ・マリア・オルブリッヒとヨーゼフ・ホフマン、工芸家・装飾画家のコロマン・モーザーなどが参加（ワグナー自身ものちに参加、大きな影響を与えることになる）。この運動が世紀末ウィーンの芸術を急激に変革していった。拠点となったのがオルブリッヒ設計の分離派館。建物上部のドームのような黄金の月桂樹の樹冠は、当時「黄金のキャベツ」と仇名されたものだ。ここでの展覧会と機関誌「VER SACRUM

（聖なる春）」で展開された活動はスキャンダルを巻き起こしながらも旧弊を打ち破り、若い才能を次々に開花させていった。



分離派館（1898）

■オットー・ワグナー

Otto Wagner (1841~1918) が建築家としてスタートしたのは1860年代初頭、その一生をかけて戦うことになる歴史主義建築がリンク・シュトラッセに建てられはじめた頃である。1894年、ウィーン市の都市交通問題委員会とドナウ運河改修委員会の芸術顧問に任命され、ワグナーはようやく自らの建築理念を、橋や駅舎など公共建築物の設計に実現させていった。すでに50歳を超え、地位と名誉を得たにも関わらず、歴史主義を根底から覆し、伝統の崩壊と、来たるべき近代建築を求めて、次々にその試みを展開していったのである。自己の芸術信条のあくなき実行が、ウィーンに近代建築をもたらしたといえる。

■ホフマンとオルブリッヒ

ワグナーの弟子であったヨーゼフ・ホフマン Josef Franz Maria Hoffmann とヨーゼフ・マリア・オルブリッヒ Josef Maria Olbrich。ともにワグナーの事務所で市営鉄道の路線や駅舎の設計助手をつとめ、ウィーン分離派の結成に参加。ホフマンはその後コロマン・モーザーとともにウィー

ン工房を設立し、家具、室内装飾、食器などを制作。装飾への傾倒がロースの反感を買うことになる。オルブリッヒはダルムシュタットの芸術家村に招かれ、アール・ヌーヴォーの曲線から離れて、より幾何学的な形態や直線を基本として多くの建築を残した。

■アドルフ・ロース

リンク・シュトラッセの歴史主義建築をワグナー以上に激しく批判したのが Adolf Loos (1870~1933) だ。1898年「ボチヨムキン都市」と題した論文を発表。エカテリーナ女帝の機嫌をとるために一夜のうちにつくりあげた都市ボチヨムキンになぞらえて虚偽建築を攻撃した。3年にわたるアメリカ生活で得た合理主義的な思考から、使用目的や機能を無視してつくられたものすべてを非難したが、ロース自身が近代の機能主義を体現したわけではなく、むしろ素材の持つ物質性にこだわり続けたといっている。近代建築に貢献したロースの仕事はラウムプランと呼ばれる効率的な空間利用で、各部屋の高さを変えろという三次元の空間思考は注目されるものだ。

■工作同盟コロニー

オーストリアにおける近代建築運動として、忘れてはならないのがオーストリア工



工作同盟コロニー（1930-32）



上：同、リートヴェルト設計の住宅
下：同、ロース設計の住宅



作同盟。これは1907年にムテジウスによって創設されたドイツ工作同盟をモデルに、1912年に建築家・工芸家・芸術家を中心に結成されたもの。人間を取り巻く環境を論理的に考察していく過程の中で建築をとらえ、実際に実験を試みていった。その最もよき成果が、1930~32年にウィーン市郊外に建設された工作同盟コロニー（ベルクブント・ジードルング）である。ロースやホフマン、リートヴェルトをはじめとする多くの建築家がこのプロジェクトに参加。2~3層の集合住宅のモデルが約70世帯ほどつくられた。現在も住宅として使われていて、一角には資料館も設けられている。

■カール・マルクス・ホーフ

1920~30年代に展開されたジードルング運動によって、大都市周辺には経済的・衛生



カール・マルクス・ホーフ（1927）。設計はカール・エー

的な労働者向けの高層住宅が次々に建設された。ジードルングというドイツ語は本来、入植地という意味だが、この運動を契機に郊外の住宅団地をさすようになる。ウィーンにおける代表的な作品がこのカール・マルクス・ホーフ。延々と1 km以上も続く長大な建物で、ここに1382戸の住宅、幼稚園、中庭、図書館などが配されている。社会主義運動の創始者ともいえるあのカール・マルクスが名前の由来。

■フンデルトヴァッサー・ハウス

原色を並べた強烈な色彩の抽象画で知られる画家・フンデルトヴァッサー。彼が設計



上：フンデルトヴァッサー・ハウス。住居ごとに窓が違った色に塗られている
下：同、エントランス部分

した集合住宅が市内にあって、現代の住宅建築への問いを投げかけている。絵画と同じように原色をふんだんに使った壁面やエントランス、ガウディを思わせるような有機的な曲線、いかにも楽しげな細部の装飾。「住居は洋服につぐ第三の皮膚」と主張するフンデルトヴァッサーが、合理主義・機能主義へのアンチテーゼとして試みたものの。1985年に完成、52世帯が居住している。またドナウ運河近くにネギ坊主のようなタワーを持つゴミ焼却場も建設中。